

他動詞な場合にわ、動詞の自他の條参照その意味お完全に
する補足の詞がいる。か様な詞お、詞章の補部と名づける。補
部となるものわ、重に體言であて、之に結びつく助辭わ、「に
と」の「と」である。

「に」……………これに、二つの意味が分けられる。一つわ、動作の
目指しとなる體言に附くもの、

お國お女房にしよーとわ、まー、あんまりひどい
もー今に入つになる頃だ

一つは、動作の關係する場所お示す意で、體言に結びつくも
のである。

私わ床にはいります。なんだか寒くなつて來ましたから
一昨日お目にかゝりました

「は」……………これも、場所お示すのであるが、「に」の静止の場所
お示すと違つて、これわ、隔てる場所お示すのである。又、方向お
示すにも用いられる。

うしろはむける

夕景になつたら手討にするから部屋は參つて蟄居して居
れ

あしたわ新富町はいら、しています

○場所お示す「に」と「は」との區別おしない方言が甚だ多い。例はば、
「西にむいて」「學校にいく」「湯をはいる」「紙を書く」など、いろいろ
がある。時とすると、東京語にも、此の區別お明かにしない事がないで
もな。

○九州地方の方言で、方向お示す助辭に、「さん」という詞がある。これわ、
軍記物などに見ゆる、「ささの、今に残つたのである。茨城邊から東北

地方にかけて用いる「山さいく」「水さはいるの」も亦これである
と思われ。

「と」……これに二つの別がある。一つわ、「與に」という様
な意味おもてる。

あの人と一緒に参加しました

母と^母しめし合せた一ぶしゅうお物語りますと……

一つわ、詞お引用する様な、又わ、下の用言お説明する意で補
部につく。

こいつも敵のかたわれと思ひまして……

賣った金子お路用として日光街道にさしかゝる

○とわしはく

さくくる

何となく

ふいと消れた

おのづと氣乗おする

の様な副詞お作ることがある。

「に」「を」「と」のいづれにも、「わ」「も」がうれくの意味で結びつい
て、「にわ」「にも」「をわ」「をも」「とわ」「とも」として用いられること
が多くある例は

母には申して置きましたがお向の人にも申しておいた方がよ
こさんし

(三)副部。述部が完自助詞で、他の詞お要しない場合、或わ、不完
自動詞、完他動詞、不完他動詞が、客部や補部によって、夫々意味
の完全になった場合に、更に、また、意味おつけ加ゆる外の詞の
ある事がある。之を詞章の副部と名づける。

又、場合によつて、この副部たる体言に、結びつく種々の助辭が
ある。今、其の助辭の種類によつて區別して見ると、
「に」……これに二つある。一つわ、補部の場合と全じく、場

所お示す意のものである。

新三郎の膝に手おついたなりで涙お膝にほろくこ
こぼしました

蒲團の上にちんこすわり……

一つわ、時お示す助辭となるのである。

學校の歸りしなに寄つて頂戴な

未明に起きて……

○助辭に「わ、補部にも、副部にも添わるから、時とすると、其の形の區別
の無いので、兩者お混向する恐がある。これわ、其の意味に立ちいで、動
詞の性質お考ねなければならぬ。

○此の種類の「に」わ、状態お示す詞に結びついて、副詞となる。

ひとりでは ちらやましうーに

○又字音に結びついて、副詞となることもある。

非常に 妙に 一緒に 別に

○又副詞にもつくことがある。

すぐに よーくに

「と」……これにも二つある。一つわ、下の用言お、説明する

様な意の詞に結びつくもの、

憎い奴と孝助おきろーとしたが

一つわ、「與に」という意のもの、

萩原さんが骨と一緒に死んで居たこの評判もある

「ぞ」……これにわ三種ある。一つわ、指定お示す意で、副部
につくのである。此の種の用法わ最も多い。

一つわ指定お示す意で副部につく

殊に孝行ものであれがお前の志に感服したと見ゆ……

一つわ、動作の起る場所お示す意で、體詞に結びつくのである。房州沖でされたのです。こゝで殺しち、ちこまずい一つわ、事物お使用するこいう意、即ち、何々お以て、こいう意、その體言に結びつくものである。

うんな氣で聞かれてわ困る

つまらない木でこしらへたからだ

○時として使用の意お強める爲に、「で」に「もて」という語おろなる事がある。

あの調子でもていたら大變なものだ

○「で」わ、又他の詞と結びついて、一つの副詞おなすことがある。

どいでいけぬものどあきらめて……

君などわまるでよいつかないからまずいよ

○此の「で」わ、もと、「にて」という助辭であつたのが、まづ省韻して「んで」となり、鼻音から唯の濁音にかわつて、「で」となつたものと思われ、うれ故、その用い方も、普通文法でいう助辭「にて」と少しも變りわらない。

「より」「よいか」「よりも」……事物お比較する時の、標準になる體言につく。

娘の方が私よりせーがたこーございますよ

どーしたて君よいかほらい

どーしたて君よりもほらい

「から」……これわ、動作の起てくる場所お示す。

ほかゝらはいった賊だろー

手紙が國から参りました

「まで」……これわ、動作の行きごまりお示す副部につく。

あれお私のごこまでとつけて下さい
いつまで言たてしよーがないよ

○「に」「で」「より」「から」「まで」「は」「を」「も」が結びついて、「にわにも」「でもでも」「よりわ」「よりも」「からわ、からも」「までわ、までも」など、なり、うれし〜の意味で、副部お助ける事がある。例はば

外からわはいるまい
夫でもいけないのか

十七八の可愛らしいこでも頭に……………

就中「でも」わ、多く反対する意お含む助辭である。

○時として、助辭の結合がなくても、副部の用おなすものがある。

あるべおたよて行く途中幸手の宿屋で……………

○副部わ、語法上完全な詞章に、更にくわしい意味お加ゆる性質のものであるが、時として、意味の上から見れば、必要欠くことの出来ないど

いふ關係のものもあるわ勿論の事である。
○詞章中の副詞わ、副句(後に述べる)と共に、各要部以外に立て、しかも、副部と同じ様な作用おなすものである。
以上の要部の外に、注意すべき二つのものがある。即ち、變則主部と獨立部とである。

四、變則主部

變則主部
これわ、心理的に主部であるものが、語法の上で、述部のうちに表れてるものである。

これわ娘でございます

なーにありー着物だ

これにわ、指定の助辭、或わ、助動詞がうわて、述部の形となてるのが例である。

○茲に「わの人わ利根りねです」といふば此の時のりこいわ、人の性質おわらはすので、心理的にも主語でわないし、かし指定の助動詞お探る所のこの形わ、他と趣お異にしてるから、一應の言い方でわ、利根お語法上の名詞と見て、變則主部とするも差支わなかる。實わ變則主部という名も妥當でわないが。

○或わ、前例の「娘」「着物」などに、特に詞章上の資格お與わないで、指定の助動詞が述部となる場合にわ、必ず其の頭に體言が來ると説明する事も、或る度まで便利な方法である。

五、獨立部

獨立部

これは、詞章の他の部分と、形式上、任務上の關係なく、單獨に立てるものである。感嘆詞わ、皆、獨立部と見るべきである。

は、ー大層かんざしおためたね

おやくさばり存じませんごーいたしましー

呼びかけの詞もこれである。

孝助たかすけごん 源助げんすけとん 殿様の御召でございますよ

おやお嬢さん よーいら、じ、い、ましたねー

○前に、主部の所で、「あいつわ劍術が出来る」の「あいつ」お、本主部。「劍術」お支主部と名づけたが、或わ、この獨立部の説によつて、

獨立部 あいつわ劍術主部が出来る述部

と見る方がよいかも知れない。尙、例お示せば、「象わからだが大きい」の「象」お、形式上獨立部と解し、意味の上からわ、主部「からだ」の所屬お示してゐるものと見るのも一説である！

以上ごわ、少し異り、要部と同格に立て、語法上の獨立價值お保つてるものがある例へば

一番いちばん話おやりましー

一席いちせきお話お申し上げます

の「一番」「二席」わこれである。又、これお、「謠」「お話」の分量お示す詞と解することも出来よし。

○單語篇でのべた接頭辭、接尾辭というのわ、体言と結びついて、うのまゝ種々の要部となるのである。

孝助どん

君などわろしいう事わざんじあるまいが

お客様になりすましてゐるんですか

六、要部の組立

簡単な詞章であるを、其の各要部わ、夫々、一つの單語から成て居るけれど、大抵の場合には複雑で、各要部は、多くの附屬する所の詞おもっている。これは、其の要部お形容し、又、意味お精しくする作用のもので、この附屬するものに、單語と、句と、節との三

附屬の單語

種ある。

(一) 附屬の單語

要部に附屬する單語は、皆、用言の連体形で、要部の体言に連るのである。勿論、合成の動詞や助動詞お伴てゐる動詞も、このうちに含まれてゐる。

來る人がありますまい(主部に附屬したもの)

昨日珍らしい本お見ました(客部に)

いらしめる所々つれて下さいな(補部に)

勝つ考でいてわ當がちごよ(副部に)

あの人わ面白い方です(變則主部に)

○獨立部にわ、殆ど、單語の附屬する例がないと云つてもよい。

附屬の句

(二)附屬の句

句といふのわ、二つ以上の單語が集り合、て、一つの意味お成すものであるが、其の作用が、形容詞と同じく、名詞お形容するものと、副詞お全じく用言や副詞の意味お、くわしくするものとの二類ある、前者お形容句と名づけ、後者お副句と名づける。

形容の句

(イ)形容句。形容句の成り立ちに二様ある。

第一わ、詞章の形お具なながら、尙、うの用言が、連体の形にて、名詞の上に連り、その性質や有様などお表す役目おも、てるもので、之にも、また、二つの小別がある。即ち、

夫から十八まで私が育てたものだから

何も御馳走のないうちと思、て下さい

の様に、主部お有しているものと、

なる程立派な男で

すぐに來てくれる醫者がありますまいか

の様に、主部がなく、只、述部だけのものとである。

第二わ、体言に、「の」「と」という助辭の結びついて、名詞の上に連るものである。この「の」「と」に、二つの用い方があ、て、一つわ

幡隨院の和尙

紹の羽織

などの様に、物お制限するか、所有おあらわすかの性質のもの。

又一つわ、

傷寒論の一冊位わ……………

番頭の文助が……………

などの様に、唯、同格お表わすだけのものである。

さて此等の形容句が、各要部に附屬する仕方、前にもいた通り、名詞のすぐ頭につくのである。

一、主部に附屬する句

花の咲く時節、よろしうございます

もー梅の花が咲きましたねー

きたない着物おきた、乞食が毎日のよーに来るんですもの

二、客部に附屬する句

私の知ってるだけお話ししておきましょう

新三郎、わ白地のゆかたお着、十三日の月おながめていますよ……

茲まで来た者お歸さなくてもいいじ、ありませんか

三、補部に附屬する句

何もご馳走のないうちと思つて下さい

お、かさんの所々、いきたいんだね

四、副部に附屬する句

夜がまだあけないうちにお立ちなさいました

何だか、外國人のうわごこの様で譯がわからない

變な男につかまりました

副句

(ロ)副句

○副部、殆ど副句と同じ任務お有して居るものであるが、副部の方、一つの体言に、附屬の形容句が頭につき、種々の助辭が下について、まどまた要部おなすものであるが、副句の方、全く用言が土台になり、夫に、助動詞や助辭がついて、述部の用言の意味お制限し、或わ、くわしくするものである。此の點で兩方が區別される。

副句の成立に種々ある。

一、動作を表す動詞の連用形が、二つ繰り返されたもの、これ
わ、其の動作の持續おあらわす。

私わいつもあるきく考ゆるのが僻で

みーみしないとあぶのーごさんすよ

二、動詞の第一連助形に、「ないで」という打消の詞のついた
もの。

見ないで下さい

私のかゆるまでにがさないでおくさ

三、用言の連用形に、指定助動詞の中止形「て」がついたもの。

縫ておいて下さいな

今日始めて慥にお前と見てこた

四、唯用言だけでなく、述部の形おなすものに、「て」のついた
もの。

其の金お路用として日光邊のしるべおたよて行く

病氣の事についていろく忠告おしていたのだ

五、述部の形おなすものに、助辭のついて出来たもの。此の助
辭に、さ、こ、よ、つある。

「ば」………上の句さ、下の詞との間に立て、理由の關係お示
す助辭で、用言の第二連助形の後につくのである。

末永くご懇意に願わなければなりません

ちんごしてさな居れば………

○古くわ、用詞の第一連助形にも、此の助辭が結びついて、用いられたも
のであるが、今わ、殆ど用いられない。唯、指定助動詞の「なら」「たら」だ

けにわ稀に用いられる。

臭かたらば鼻おつまんでもらわなければなりません

けれど、「なら」「たしも、多くわ」ば「お探らずに、其のまゝで用いられる。

移たらすぐおしらせします

いやならおよしなさいよ

「ご」……上の詞おうけて、下の詞お説明する様な助辭で、
用言の終止形につづく。

徳があるご見ゆて

しへるといけません

親にも見せない、といううれわく、中々やかましい帳

面

「ごて」……殆ど「ご」と同作用であるが、唯、反話の意お有し

て、下にくる用言わ、必ず、打消のものである。又、「て」ご發音
されのが例である。

何と言た、獨身のうちのよーに氣散じわないのさ

されば、て余り没義道なごわ出來ませんし……

「じ」……指定する意で、用言の終止形につづき、直に夫

お打ち消す詞お、下に引き起す助辭である。

よく世間にあるじ、ありませんか

變にすくんで居なくてもいーじ、ないか

○「じ」「わ」「で」と「わ」と結びついた「でわ」の轉じたものであるから、

之が、體言にいつた場合にわ、副部の助辭「でわ」と全じに見てもよい。

之にうろじ、ないとも

自分免許じ、あやしいもんだ

「ながら」……動作の持續お示す助辭で、動詞の連用形につづく。

さすがわ生、きながら山の神さまも崇められるほどの……
相川の爺さんが汗お流しながら殿様に願って……

○もと、動作の引き續く事お表して居た「ながら」がだん／＼に意味が轉じて、今では、反意お示す助辭となり、此の方の意で用いられる事が多くなっている。

兄弟の様にしているながら他人行儀なの面白くない
あすこまでいきながらなせ見てこないんです

○「ながら」わ、又、反意で、體言にもつく事がある。此の時わ、之、お副部の助辭と見ても差支わない。

自分ながらおかしくなりました

○以上の成り立ちの外にも、場合によつて、色色のものがある。「の」にとい

う助辭も、副句お作る事がある。

この暑いのによくまいお精がでますね

此等の副句わ、大抵、迷部の用言に附屬するお例とするが、時として、漠然と、詞章の全體に關係して用いられることがある。

實際おいらは兩方がわるい

今度呻れば私どもの番だが……

相變らず一席お話お申上げます

實わ幽靈に頼まれたというのも色々譯があつて……

附屬の單語、或わ、句わ、一つの要部に、必ず、一つこわ限らない。單語のいくつもあること、或わ、語、句、及び、副詞が、いりまじつて、複雑になつて、ることもしば／＼ある。

猫の額の様な家だ

節

私わ何もお詫おする様な不埒な事おしない
形容句 形容句 形容句
 雪の降る冬の寒い晩だった……
形容句 形容句
 雪がばら／＼この外の板戸おうつ音に驚いて……
形容句 形容句
 又萩原さんが首にかけた大事な守がすり代って居た
形容句 形容句 形容句
 其の脉お取れば運よく全快したが實わ僕が直したん
副詞 副詞 副詞 副詞
 じつないひごりてになおったんだ

(三)節

節ごわ、主部と述部とお具わて、完全な意義お表す詞章が、只、接
 續の助辭によつて、互に結びつけられて居るものおいう。此の接
 續の助辭に種々ある。

「し」……これわ、只、二つの節お接續するだけの助辭である。
 試験も濟みましたし論文も大抵になりました
 あの人の正直だし可なりに藝も出来る
 「から」……これわ、理由の關係ある二節お接續する助辭
 である。
 賑やかだから あなた いてごらんなさい
 お類さんのもあるから 探して見給
 もしうれからわ行く度にぶあしらいお蒙るのだから
 さすがに誰も行く氣わなくなるわね
 「ので」……これわ、「から」よりも、一層緊密な理由の關係お
 示すのである。
 殿様が落ちたさいうので大騒になつた

雨が降ったのでよーく助かりました

○「ので」わもと、體言と同じ任務お有する助辭の「の」と雜の助辭の條 参照指定の意の「で」と結合して出來たものである。

○或る方言でわこの「ので」お、「から」というべき軽い意の所に用いて 居る。

「が」……………これわ、第一節の意に相違する第二節お接續する。

私なぞわごく臆面のない方だが、やっぱりこまるね

あの人わふだんおこなしい人ですが、酒お飲むござい
もいけません

「けれど」……………これわ、殆ど「が」ご全意全作用である。

君もこれからわつめたかろーけれど、水にもはいり：
私もいて見たいのですけれど、何分病人がああの通りな

もんですから……………

○「けれど」わ、人によつて「けーど」「げども」なともいわれる。又「げど」
という人もある。

今になつて申上げて追つかない事でございませうけれどね

○又、講活などの様な、固苦しい場合の詞にわ、矢張、「けれど」の用いら
れる事が多い。敘述文の言文一致體などにわ、殊に普通と言つてもよい。

「のに」……………これわ、反詰する様な意で、二つの節お接續する。
そーさう云々ば見てや、たのになせいわなかつたの
あちらがずんく進むのに、そーぐつくしてわ居ら
れない

○「のに」が省略され、「に」だけとして用いられる時もある。

一つ地面のうちに居りますから何時でも見られませうに……
「もの」……………これも、反詰の意の接續助辭であるが、自然、「の

に「ごわ同じでない。

お前が悪いんだもの叱られるのわ當り前だ
だてわたしにわむづかし過ぎるんですもの

○「のに」もの、わ實際、接續の作用おなすものであるけれど、前例にも
見る通り、往々、第一節があるだけで、助辭以下の第二節が省略されて
る事がある。

節わ、助辭で接續されるという事の外わ、全く、一つの詞章であ
るから、一つの節の組み立てや、要素わ、殆ど、完全詞章の上につ
いていたと同じである。即ち、各要部、又、各附屬の語句、副詞お有
するここが出来る。たゞ、第二節の方わ、多く諸要部の省略され
てる場合が多いだけである。省略の事わ、又、後にのべる。

(四) 詞章の後に副々られる助辭

詞章の後
に副々る
助辭

助辭にわ、附屬の語や、句や、或わ節の接續なごお司るもの、外
に、完全な詞章の後にそわて、種々の意味おつけ副々たり、語勢
に變化お與へたりするものがある。今、其の意義お區別して述
べよ。

「か」……………これわ、不定の意の助辭で、不定や疑問の詞章に
わ、之が副わる。

御客様がお出でになりましたか……………(疑問)

あの結果わご一なるか……………(不定)

○實際、疑問、不定などの意がなく、只、其の詞章の意お強く表す爲の、修辭
の一法として、「か」お使用する事も往々ある。

文一わんまりひさいじ、ないか

○「か」わ、詞章ばかりでなく、體言にもついて、疑問、不定の意を表す。
あなたか私かどちらか一人さいれば……………

○「か」わ又句お支配する助辭「と」に伴つて用いられる事もある。

面白くないど、か不見識な面おして居るとか……

○「か」わ、又、稀に、副句お作る事もある。

なんだか私がひどく細君に恐れ入つて……

どーか勝たしたいと思ひます

○此の「か」が、「もの」と結合して「ものか」となり、詞章の最後について、

反詰する意お表す助辭となる事がある。

理屈がちがつていたらば、にーさんもなにもあるものか

ろんな事おしたていくものか

○「ものか」わ、發音の便宜の爲、しばしば省韻して「もんか」となる。

僻易してたまるもんか

○此の「ものか」「もんか」の「もの」わ、もと、體言であるから、次の様に、助

動詞の用いられることもある。

おんなじ人間ですもの 出来ないことがあるものですか

「かい」………これも、不定の助辭であるが、多く、自分より目下

のものに向つての、親しい詞にでなくてわ用いられない。

お前 うれでもいゝかい

き、こあさ^(明後日)てこられるかい

○安房邊の方言でわ、これお「かほ」と發音して、對等以上にも用いてる。

善さんどれますかほ

「かほ、かい」わ、もと「かよ」であるー

又、體言にもそわり、體言の代に用いられた「の」にもそわる。

折角も、た所帯だからたゝんでしもーのも面白くない

さいうのかい

久しく拜顔お得ないが御達者かい

「ね」………これわ、強示の助辭である。強示さいううちでも、之

わ、自分の云う所お強く確める爲に、對者の心お促す程の意があつて、然も、一般に、親愛の情が含まれている。

○語調の爲に「ね」として用いられることも多い。

神罰わたちまちだね

おもしろーございましたね

ほんとうと思われませんか

此の「ね」お使用することの頻りなわ、東京語の一つの特色とも見るべきもので、詞章の終にだけでわなく、副詞の後や、用言の中止形の後などにも副々られる。

きのーね四谷のうちいきましたらね源さんが見ゆ

ましてね皆さんに宜しくつてねそーいーましたよ

○丁度畿内地方の、「な」お頻りに用いるのに似て居る。

此等わ、全く、對者の注意お促す爲に用いられるのであるが、又、同じ意で獨立にも用いられる。

ね 君 ーじないか

ねね おきゝなさいよ

「よ」……これわ、「ね」に殆ど同意であるが、唯、「ね」が對者の

注意お促すのに比して、やゝ力が弱い。

しまいにわ年始だけの顔出しになるよ

もーこの位にしてよしましーよ

そんな事しち、いけないよ

婦人語にわ、種々の場合に用いられる。又、兒供などの甘ゆる詞にわ、獨立に用いられる。

わたしよくつてよ

ほんごに面白い方よ
よよ 見て頂戴よ

「な」……これも、殆ど同義であるが、婦人語としてわ、尤も親愛の間がらに用いられるだけである。

見て頂戴な

まて下さいな

「わ」……これわ、全く、婦人語に限っての助辞である。

なんだかおかしいわ

うーだわ

○少し崩れた詞でわ、「わ」が「ます」についで、「ますわ」となつたのか、更に發音の便によつて「まさー」となる。
うんなこと、さまでませーね

「さ」……これわ、「ね」「よ」に比べて、余程切實でない。又、不丁重の詞でもある。そして、其の用いられるのわ、用言の略された時に多い。

うここが妙さ

末永く御懇意に願わなければうらさ

「ごも」……これわ、強示お表すうちでも、余程力が強く、自信お表すというぐらいの意に見てよい。

わゝ うそじゃないごも

わゝく よろしうございますごも

「ろー」……これわ、推量お表す助辞で、これが詞章の終にそれれば、其の用言わ推量お表す意となる。
ハンブルグまで、よわほどあるんだろー

お上さんが澄まして居るから水だろー

○「だろー」が「わ」であるので、「で」と「ある」とに分けられ、「あるー」がまた「あら」と「う」とに分けられる。肯定助動詞推量の條参照。けれど、この場合には却って、「ろー」が一つの助辭と見た方が理解し易い。又、實際、うの方に發達しかけているのである。

「な」……………これわ、禁止お表す助辭で、これがうわれば、其の用言が禁止される意となる。

手のない所お、もーおかまいなさるな

あんな所おいらしいますな

○これお、親愛の助辭の「な」と混同してはならぬ。

(五) 雜の助辭

雜の助辭

以上の様に、詞章中に、一定の位置お占めるのでわなく、種々の

所にそわって、詞章の組み立てお、助ける助辭がある。詞章中に、一定の形式というべき程のものがない所から、假に、之お、雜の助辭と名づけておく。

「わ」……………これわ、語、句にそわって、特に注意お起させ、其の意お強める助辭である。主部、客部の場合わ、前に其の條で述べておいたし、又、補部、副部の條でも、他の助辭との結合について、少し述べておいたが、尙、之に加けて、二三の例お示すことよ

1. 今のすまいお立ちのこーさわ思いましたけど……………

根津の清水でわ女の泣き聲がするな……………

一步でも退く様でわ大事おしごげる事が出来ない

伴藏の思うにわ……………

停主わもこわ武士で……………

初の間わ夫婦とも一生懸命にはたらいて……………

其所々いいてわいけない

又、合成動詞の間に挿て、其の意お強める例々ば

奉公人の手前に免じ我慢わして居りましたが……………

君なごわお心得わあるまいけれど……………

又、「わ」によて、新しく合成動詞が作られることもある。

うんなに遅くさわしまいとおもーが

まだなくなりわしますまいよ

「の」……………これに三種ある。一わ、體言ご全じ任務お有して、用言の連體形お受ける。これわ、意が莫然ごして、特別に名詞お置くことの穩當でない場合に、うの名詞の代に用いられる

ので、非常にしばく起る。

へだりの出来るのわ實わ致し方がないのだ

夫ご申ますの色々事情がありましたので……………

○この「わ、或わ、もの」から來たものと思われる。

一つわ、一種の接續助辭ごして用いられるもので、「ごか」ごいう助辭ご、殆ご全意義である。

いくら才子だの色男だのごあごおなでゝも……………

一つわ、叙述の詞お省略して、其の代に、此の助辭おおゝもので、これわ、一種の修辭法ご見てもよい。

省略わ、連用形以下が省略されるのである。

軽い所でおつーあてこすられの 少し重しご……………

その揚句がひばり出しの其の晩が……………

「ろ」……これわ、「すがた、有様」という名詞であつたのから、
うつりうつて、今わ、たゞ、推量おあらわすだけの形式語となつたのである。しかして、これが、他の詞お受ける時にわ、助辭的で、自分か他の詞に連る時にわ、名詞的である。

一、動詞の連用形おうける。

答が出來ろーです

大抵參りろーなものです

二、形容詞の語根おうける。但し、その語根が一綴音お時にわ、其の間に「き」お挿む。

うれしそーに見ゆました

あんまりひごろーです

なんだか なさそーじ、ありませんか

獨立の助辭

よさ。ろーなものです
三、體言の或る場合と全じく、指定助動詞「な」に連る。
面白ろーな外題でした
大抵參りろーなものです
四、體言の様に、詞章の要部となることもある。
天氣が變りろーです
もすこしで勝ちろーに見ゆたが
(六)獨立の助辭
以上わ、詞の間、或わ、後について、體言、用言などお助ける助辭であるが、此の外に、他の詞とわ關係がなく、獨立に用いられて、色々な意義の接續詞とも見てよい助辭がある。之をお獨立の助辭と云う。

だが ひこりや、や、てるこわららいじ、ありませんか
だから 私の云う事おまき、なさい、さういふんですよ
だけれど よく考へて見ると賛成の出来ない點もあ
る

だって も少しいけうーなものですからねえ

○これらわ、指定の助動詞「だ」に、節お接続する助辭「が」「から」「けれど」「とて」が結合して出来たものである。これわ、實わ、前に話された句お、無言のうちに豫想し、それと、今言ひ出す詞とお、結び合せよーとする、助辭であるから、形の上でわ、獨立の様だが、意味の上では獨立して居
なす。

○普通の對話にわ、余りないが、少し嚴格な話とか、或わ、演説講話などの場合にわ、節を支配する助辭「が」「けれど」などお、節と引き放して話
すことが澤山ある。此の時の助辭わ、丁度獨立したものと見ることが

各部の順序

詞章お組み立てる主部、述部、又、その間の客部、補部、副部、及び、う
れらの附屬の語、句、節お排列するに、普通の順序がある。

一、主部わ、詞章の最初に立ち、述部わ、其の後につゞく。

主部

述部

あいづつがこのうちのむすこの風おしまし、

二、述部のうちで、用言わ、詞章の最後におかれ、客部わ、主部と
用言との中間に立つ。

出来る

非常に探しました が 中々見つかりません

頼む様に聞こゑる けれど、 實わ……

○「けれど」が、獨立には大抵「けれど」として用いられる。

(七) 要部附屬部の順序

主部 — 客部 — 用言

あいつが此の内の息子の風おしまし

三、全じ述部のうちに、客部と補部とある時にわ、補部わ客部の先に立つお例とする。

補部 — 客部 — 用言

畑にわこやしおしなれば……

孝助と喧嘩おさして……

四、副部わ、補部と全じ資格お有して居るもので、客部と副部とある場合にわ、副部わ客部の先に立つ。

副部 — 客部 — 用言

夫から色々おほらおふいて

○しかし、客部と補部副部との規則は、必ずしも嚴格には守られない。詞のつゞき具合の都合によつて、色々に變せられる。これは、後の轉換の場合のべよ！

五、副部が二つ以上ある時にわ、時に關するものわ最初に表れる。

主部 — 時の副部 — 他の副部 — 用言

父わ三年あこに病氣でなくなりました

私わ昨日 旅行先からもごりました

六、所に關する副部わ、他の副部の後に立つ。

他の副部 — 所の副部 — 用言

おひろいで役所えいらしるんでございますか

他の副部 所の副部 用詞

怪しい姿で茲に死んでたさいうのも……………

七、「から」のつく副部と、「まで」のつく副部とあれば、必ず

「から」の方が先にたつ。

貝殻骨の所から乳の所まで……………

東京から横濱まで……………

八、各部に附屬する語句を、夫々の要部のすぐ前に結びいつて表れる。

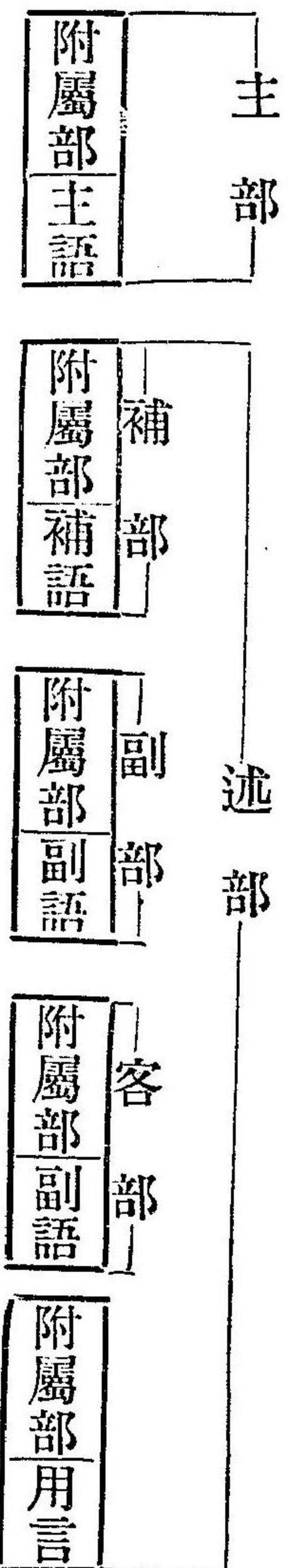
こんな苦しい事主ありません

あいつが此附のうちのむすこの風客おしましー

根津附の清水の花壇補に埋め……………

僕附の鑑定副でわ慥にお前用言と見てこつた
あれ副詞おうまくたまし……………

今、附屬の語句お含んだまゝ、主部、客部、補部、或わ副部と名づけられ、附屬の部分お除いた體言だけお、各、主語、客語、補語、或わ副語と名づけるのがよからし。之お圖であらわせば、

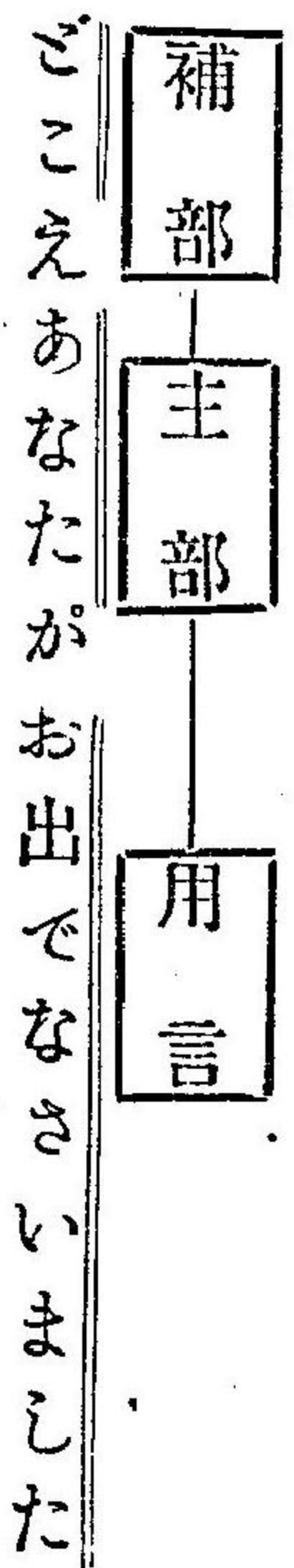
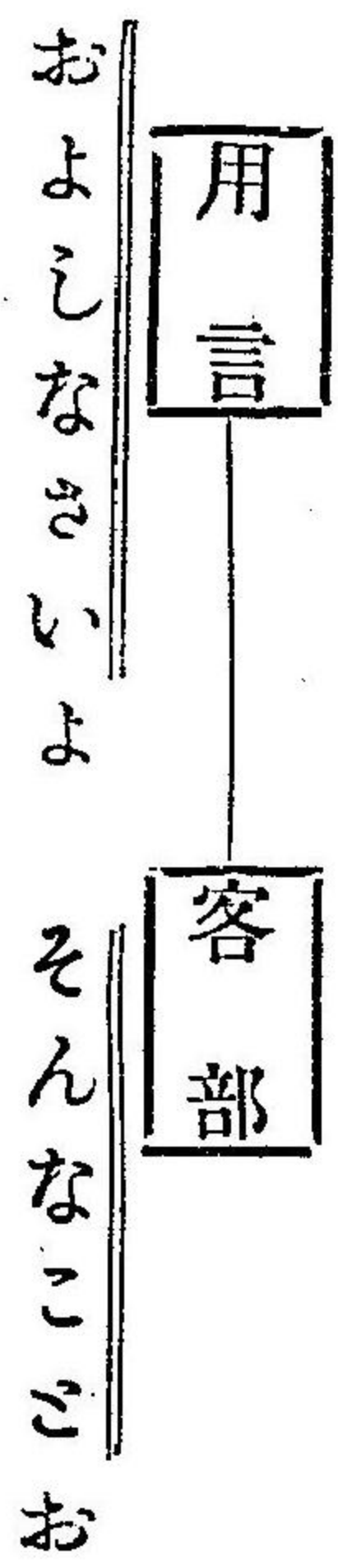


八、要部の轉換

以上わ、最も簡単な普通の順序であるが、又、種々の場合によつて、種々の話しぶりが起り、從つて、以上の様な順序お、かゝる事が、決

要部の轉換

して珍らしくない。次に、うの重なる場合おのべよーなら、
一、最も力お入れよーとする部分わ、一番さきにおかれる。



二、力強い、表をーとする爲に、普通の順序の第一節と第二節と、位置の轉換することがある。

第二節

第一節

……探して見給は お類さんのもあるから。
三、もし、おほくの附屬お有して、長い形おもてる補部か副部かのあるときわ、普通の順序おかえて、主部の先にたつ事がある。



四、又、副部や補部の意おうけて、初めて主部の起って來る様な場合、合にわ、勿論その副部、補部が先で、主部が後になる。

副部

主部

用言

いーのお、いーごいう分にわ差支わあるまいじやないか

○副詞の位置わ、大体關係する用言のすぐ上に結合するのが例であるが、時によつて、必ずとわ定らない。

蒲團の上になんとなすわりじと伴藏の顔お睨むから

蒲團の上になんとなすわり伴藏の顔おと見つめている

此の通り、殆どある點まで勝手である。

九、要部の省略

要部の省略

一體、詞章にわ、必ず、主部と述部とがうなわつてなければならぬものだけれど、ふだんにつかう詞でわ、いつれかの要部の省略されてることが甚だ多い。

主部の略

(一)主部の略される場合

一、話す人自身が、殊更に自分お表す必要のない時。
今(私)が参上しよーと思つてる所でした

なーに(私)わ、ごーもありませんが………

二、對稱の代名詞も全前である。

(あなた)何お笑つておいでなさる

(君)わ、いつお歸りでした

三、云わなくとも、自他共に、何について話されてるかお認めてる時。

ごーか(天氣)が晴れてくれ、ばいーが

お類さんの(帳面)もあるがら………

四、命令の詞章。

こちらはおいで
ごめん下さい

五、漠然として、主部お意識しない場合。

こー毎日雨にふり込められちー (たまりません)

六、助辭で接續された第二の節の主部

君なごわまるでよりつかないから (拙いよ)

私の死ぬのわ元より覺悟だけれご (これまで殿)

様のご恩になつた其の恩お……………

七、全じ主部の詞章が、いくつも累ねられる時。

私わ何もお詫おする様な不埒おした事わない(私が)ご
奉公に來た時から……………

(二)述部の用言の略される場合

用言の略

一、此の要部に務必ず此の用言ごきまてる時。

まごにおそーく様で(ごさいました)さよーなら
内々い。たら宜しく(申しあげておくれ)ごお。い。ま。し
た

二、きまてる時でなく、或る特別な場合にでも、他の要部おいた
ばりで、夫につゞいてくる用言が推量される時。

おと、つんの湯呑わ(どこにある)

三、用言お省いて、他の要部の意味おつよめよーとする時。
そんな馬鹿なごお(する事が出来るものか)

これわ御吸物(ごさいますか)誠にありがごーごさい
ます

客部の略

四同様の用言お有する二つの詞章お略して、一つの詞章に言
い表すとき。

才も並すぐれですし學問も人並勝れですから……
遠慮もなさういなものだし糸瓜もなさういものだ
が

○又修辭的に意味お強めよとして用言の省かれることがある。

いや、また銘々もひとかど紳士の氣

一遍帳面にとめられたが最後 (も) 夫からわ……

(三) 述部のうちで客部の略される場合

一、言わなくとも、自他の明に客部として認めてるものな時、或
わ、殊更にいうのが、面遠な時。

あら 今迄こゝにごさいましたのに あなた(あれお)

補部の略

ごいなさいましたの

うちの殿様がお里になて(孝助お)やるのだからいけま
せんよ

君 ごぼけち、いけない みんなお菓子おたべちま、
たくせに

二、全じ客部お有する二つの詞章お、一つの詞章でいゝあらわ
す時。

あんなちいさい子お うたり(あんなちいさい子お)蹴
たりして……

(四) 補部の略される場合

客部の場合と殆ど同じである。

あすこの湯がきれいでございますから あなたちい

副部の略

(湯)にはいていら、し、いませんか
此の頃わ役所を出たり(役所)出なかつたり氣まかせに
して居ります

(五)副部の略される場合

これわ、客部補部の場合と同様である。

何が うろの事が(私)の話にあるものか

新さまが(學校)からお歸りになりましたか

○客部補部副部が、主部にくらべて、詞章中に起ることが少いに従つて、殊更に省かれると見るべきものも少い。殊に、副部なぞを論理的に考へれば、異なる様なもの、實際却てない方がいゝ事が甚だ多くある。
○國語の性質として、詞おなるべく簡略にするという傾がある様であるが、以上の様な場合にわ、不都合の起らない限に、つとめて此の傾向が主張される。

各語の略

(六)主語、客語、補語、副語が略される場合

一度詞章のうちに表示された體言が、又繰り返される時、其の繰返すべき語お省く事がある。

細君さいうものわどこの(細君)でも……………

お類さんの(帳面)もあるから……………

又、形が省略に似ているが、實わ、用言お其のまゝに一つの體言と同じに見たもので、殊更に省略されたのでないものがある。これわ、附屬句と附屬節とに起るものであるが、場合わ余り多くない。

備前ものゝつかに手がかゝるが早いやすらひさ
ぬき……………

あれでわ乞食おするより外に仕方があるまい

詞章の種類

ちまごかせおいてくるやつ
かれこれ生活が複雑になるにつけて

十、詞章の種類

詞章の種類お分つに、構造の上からミ、性質の上からミの二種ある。この分類にわ、不要の點もあり、又重要な點も勿論あるが、精しい研究わ後に譲ることゝする。

日本口語典終

明治三十六年十二月二十日印刷
明治三十七年一月一日發行

日本口語典 全一冊
賣價金六拾五錢



著 者 鈴木暢幸

東京市神田區三崎町三丁目一番地

發 行 者 村瀬兼太郎

東京市本郷區湯島一丁目三、二番地

印 刷 者 松本秋齋

東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所 大日本普通學講習會出版部

會長子爵永井直哉
資助員及科外講師 博士十名
通信講習會會員募集

大日本普通學講習會

目下入
會に最
も便也

(科學及) (師講) (會本)

益の講義録として發行し、會員に於て中學校程度の普通學全科目を通信教授法により新在

修身博士大家 石川翁吉 東洋史 丸山正彦 西村教授 山正彦 幾何學 石川翁吉 林理學士 地理學 吉田弟彦

倫理 井上頼吉 世界史 高木秀雄 三角學 石川翁吉 蒲田理學士 物理學 藤永七郎 氣象學 永井三郎

國語 鳥羽幸次 英文學 鈴木 小松久 法學 永井三郎 經濟學 永井三郎 簿記 永井三郎 商業學 永井三郎 教育學 永井三郎

國語 丸山教授 獨逸語 飯山教授 漢文法 丸山教授 作文法 丸山教授 習字 丸山教授

本會は文部省令の趣旨に基き、中學校程度の普通學全科目を通信教授法により新在

益の講義録として發行し、會員に於て中學校程度の普通學全科目を通信教授法により新在

錄毎月二期講習十五月卒業
細詳規月二冊宛發行を以て郵券貳百六十丁目一番地町助文平章五分四十分添教

大日本普通學講習會

◀ 新刊書報 ▶

文學士 鈴木暢幸先生著

日本口語典

洋裝美本 全壹册
金文字入
紙數菊版二百卅六頁餘
定價金六十五錢
外に郵送料金六錢

國語問題の愈盛ならんとする今日口語研究の良書なれば吾が學界の一大欠點たり古典文法の研究は幾百年來の盛事なるも口語に至つては殆ど見るに足るものなし豈にまた**國民教育**の一大憾事にあらずや本書は先生が積年の研究により著述せられ稿を改訂する十數回一字一句を忽にせず内容豊富叙述正確曖昧なる口語文典とは其の撰を異にし**口語と文語**との關係歴史を明にし**標準語と方言**との差異を説き例證一々事實を離れず輕佻浮華の著作多し現今真に責任ある好著と云ふべし國語の研究に從ひ或は教育の大事に當る士は勿論苟も我が國標準語の何たるを解し正確なる口語文を編せんとするの士は必ず精讀せざるべからざる良書なり

●明治三十七年一月元旦より發賣

發行所

東京市神田區三崎町三丁目一番地

大日本普通學講習會出版部

會長子爵永井道隆
通信講習會員募集

大日本普通學講習會

（科學）
●修辭學 石川文雄博士
●倫理學 島野幸次博士
●國語學 高木繁博士
●文學史 鈴木重幸博士
●英語學 鈴木重幸博士
●漢學 鈴木重幸博士
●佛學 鈴木重幸博士
●印度學 鈴木重幸博士
●地誌學 鈴木重幸博士
●經濟學 鈴木重幸博士
●社會學 鈴木重幸博士
●教育學 鈴木重幸博士
●心理學 鈴木重幸博士
●生理學 鈴木重幸博士
●動物學 鈴木重幸博士
●植物學 鈴木重幸博士
●天文学 鈴木重幸博士
●地理學 鈴木重幸博士
●算術 鈴木重幸博士
●代數 鈴木重幸博士
●幾何學 鈴木重幸博士
●物理學 鈴木重幸博士
●化學 鈴木重幸博士
●生物學 鈴木重幸博士
●衛生學 鈴木重幸博士
●醫學 鈴木重幸博士
●農學 鈴木重幸博士
●林業學 鈴木重幸博士
●工業學 鈴木重幸博士
●商業學 鈴木重幸博士
●法律學 鈴木重幸博士
●政治學 鈴木重幸博士

●大日本普通學講習會

山内岩雄先生著述

新編文章作法

菊版大形洋裝美本

全一册

正價一册

金參拾五錢

外に郵送料四錢

凡う何人も自己の健康なるを尊び壯明なるを欲するが如く文章は自己の思想感情を表記するものなれば最も能文達筆にして苟も精麗優美ならざるべからず坊間此種の書其數甚だ多しと雖も未だ克くその要を得たるものを視ず誠に遺憾とする所なり。本書は山内岩雄先生多年の研究に成りたるものにして尤も平易に最も懇切に文章を作る法を説明せられたる良書なり故に苟くも筆を採りて文章を作らんと欲するものは士たるに農たるに將た商工たるを問はず本書を机上に備ふるときは金玉の文章を得る決して難からず幸に繙讀を給へ

◎御注文次第即日送本す◎送金爲替は神田三崎町郵便受取所◎郵券代用一割増の事

東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所

大日本普通學講習會出版部

▲最も簡便にて有益の字典は本書なり▼

增補新選字典

正三位子爵 福羽美靜先生題詠
陽明學大家 谷口藍田先生題辭
陸軍 教授 西村 豊先生題字

學習院教授 谷口豊五郎先生序文
大日本普通學講習會編纂

寸 珍 美

全

定

價

金

貳

拾

不

要

錢

册

本

本書は文部省新令に準據して讀書並に作文の便に供する目的を以て、漢字中の普通平易なるものを選び、之に音訓釋義を施したる一種實用の字典にして、最も有益のものなり。字數敢て多からざれども、一般に必要なものは悉く之を輯め、索引に簡潔なるを以て、何人にも容易に之を引用するに便なり。本書初版數千部を賣盡して、第二版を上梓せり、御購求を乞ふ。

東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所

大日本普通學講習會出版部

▲實用に的する有益の字典は本書なり▼

國學院講師 石川岩吉先生講述 (新刊)

倫理講義

洋裝全一册
美本全一册
紙數菊版百五十頁
賣價金三十錢
郵送料四錢

本書は石川先生が嘗て本會講習會員の爲め講述せられしものなり其講義の明晰平易にして且懇切周到なるを教材の斬新有益なるは已に定評ありて更に之を贅辨せず坊間普通倫理書多しと雖も本書の右に出ざるものあるを見ず實に中學校師範學校の教師生徒は勿論小學校教員の参考として最も有益なるのみならず普通學科の獨習者には好師友なり幸に閱繙して此言の虚ならざるを知れ

御注文爲替神田三崎町郵便受取所振込●郵券代用一割増●即日送本す

近刊

● 日比谷中學校講師 小松定市先生講述
● 理學士林 茂増先生校閱 講師大原銚一郎先生講述

生理衛生學講義 全壹册
幾何學講義 全壹册
附問題解答

發行所

東京市神田區三崎町三丁目一番地

大日本普通學講習會出版部

女子學藝講習會編輯

(新刊)

女子學藝全書

本書は女子學藝講習會が通信教授法により會員へ頒布せし講義録を分類合綴して美麗なる洋裝二巻としむ者也其内容の如何は既に世の定評あれば今茲に之を數せず次に科目及講述者の氏名を掲げて之を知らしむ

上卷目次

家庭訓話	華族女學校長 下田歌子
家政學	帝國婦人協會長 下田歌子
家庭衛生	東京女學館講師 藤井靜子
日用法律心得	女子學藝講習會 磯部武者五郎
女禮式	東京女學館講師 國分操子
西洋禮式	帝國婦人協會長 下田歌子
茶式	伯耆 松浦 龜井さき子
插花	女子技藝學校講師 龜井さき子

下卷目次

刺繡	西日本料理 赤堀 峰吉
裁縫	日本女子大學講師 井上さつ子
洋裁	女子共立服装學校講師 長谷川 岩吉
日本料理	日本女子大學講師 山崎 武八郎
縫紉	元華女子學校講師 太田 富子
花物	東京女學館講師 西村 はや子
園藝	東京女學館講師 小野 秋子
家庭遊藝	東京女學館講師 川 安子
家庭文藝	女子技藝學校講師 井 安子
女子文藝	女子技藝學校講師 井 安子
女子作文	女子技藝學校講師 井 安子
女子作詩	女子技藝學校講師 井 安子
女子作畫	女子技藝學校講師 井 安子
女子作書	女子技藝學校講師 井 安子
女子作字	女子技藝學校講師 井 安子

發行所

東京市神田區三崎町三丁目一番地

大日本普通學講習會出版部

製本出來●御注文爲替神田三崎町郵便受取所振込●郵券代用一割増●即日送本す
金引替小切郵送は一切御断り申上候

小學教員講習會編纂

(新刊)

小學校教員學科講義錄

全貳册

洋裝本綴類美本
紙數一千六百頁餘

實價金貳圓也外ニ小包郵送料貳拾錢と申受く

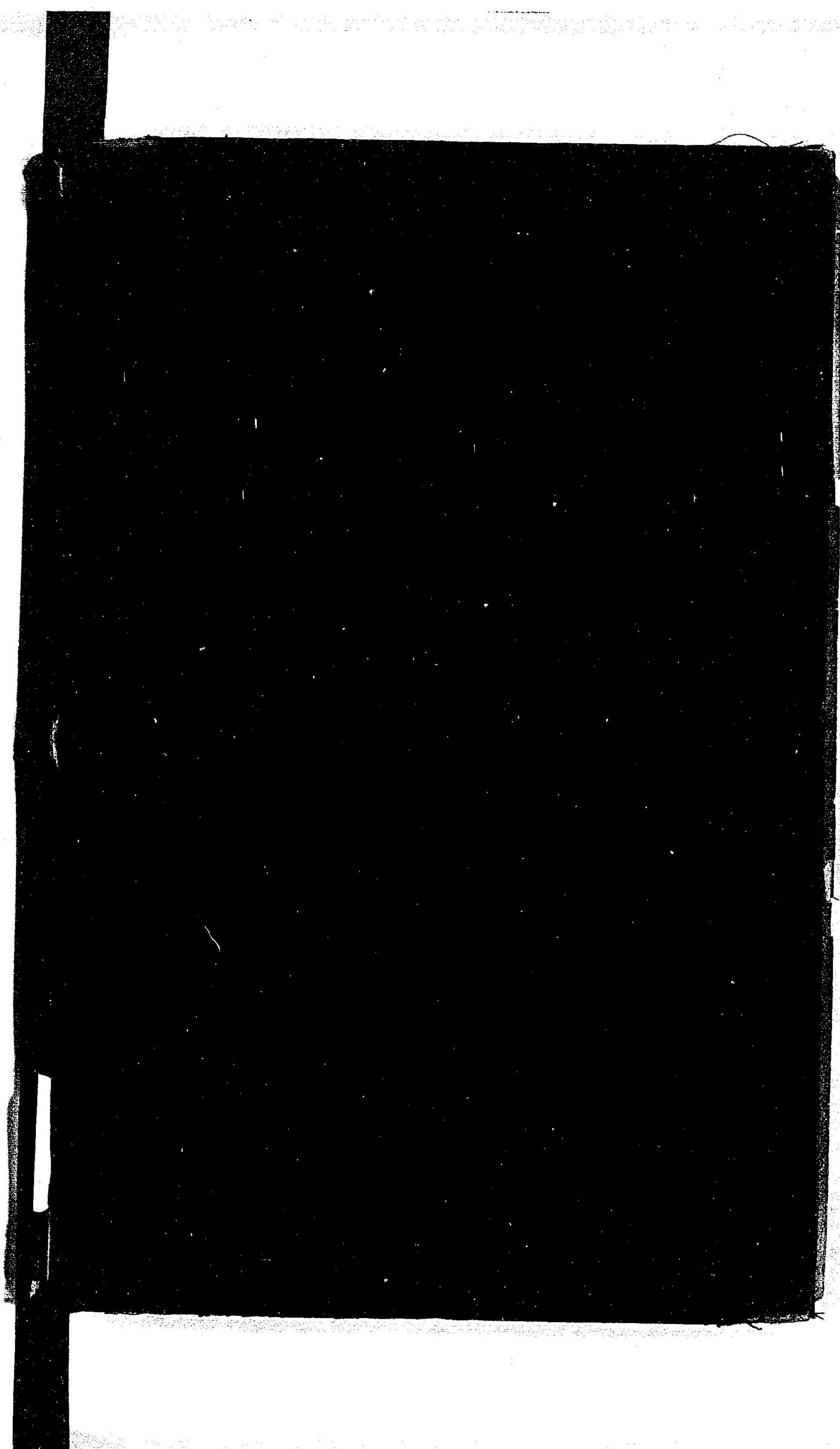
右は本會が講習會員へ頒布せし通信教授の講義錄を縮讀の便を計りて各科目毎に分類合綴して美麗なる洋裝二卷とせしものにて今般前記の實價を以て發賣するにこなせり而して講義學科目及び擔任講師の氏名は左の如し……何卒篤學諸氏の愛讀を切望す

- 倫理學講義……文士 速水 混先生
- 最新教育學……文士 五島 陸三郎先生
- 最近教授法……文士 春山 作樹先生
- 國語文讀義……華族女學校教授 井上 頼園先生
- 國語文法……東京府 四中 杉本 直一先生
- 製本出來……御注文次第即日送本す
- 受取所宛振込……郵券代用及び代金引替小包郵送は一切御斷り申上候
- 國語教授法……師 高橋 龍雄先生
- 地理講義……師 大森 千藏先生
- 日本歷史……師 横山 達三先生
- 新算術講義……師 大森 千藏先生
- 理科講義……師 大森 千藏先生
- 小學校分科講義……師 大森 千藏先生
- 神田區三崎町郵便

發行所

東京市神田區三崎町三丁目一番地
大日本普通學講習會出版部

77
389



77
339

078511-000-8

77-339

日本口語典

鈴木 暢幸/著

M37.1

DAC-2211



